

一般財団法人とつとり県民活動活性化センターが発行する情報誌「いまとこれから」は、「いま」地域で解決が求められている社会的な課題、その解決にむけた動きや取り組む人々の姿に光をあて、県民の皆様、とくに「これから」を担う若い方々に活動参加の機会を広げるメディアとして成長していきたいと願っています。

読者の皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

編集長 毛利 葉

地域づくりの小ネタ

センターは地域づくり団体全国協議会の鳥取県の窓口となつておらず、県内の地域づくり団体同士の交流や、情報発信を図るため、センターのホームページから「団体登録」の募集を行っております。詳しくはセンターホームページをご覧いただき、お電話・メール等でお問い合わせください。是非、多くの方にお問い合わせください。是非、多くの団体の登録をお待ちしております。

地域づくり団体全国協議会主催で、毎年開催される「地域づくり団体全国研修会」の登録をお待ちしております。

修交大会は、本年度は三重県で開催されます。この交流会は、地域づくり団体関係者や地域づくりに興味のある方、行政関係者を対象に、自主的・主

体的な地域づくりの推進に資するための全国レベルの研修を行うとともに、参加者相互の情報交換等の場とするものです。第32回地域づくり団体全国研修交流会につきましては、次号で紹介させていただきたいと思います。

ボランティアの小ネタ

今、「あるまとプロボノ」の鳥取」というプロジェクトがNPO法人サービスグラント(東京)の協力のもと進行中。関東・関西エリアのプロボノワーカー達が、ウェブサイトのリニューアルなど、それぞれの目的に合わせて県内のNPO・3団体(学生人材バンク、ハーモニーカレッジ、山陰福祉基金)のために頑張ってくださっています。8月と9月には各プロボノチームが県内で合宿・鳥取県の良さと各団体の活動を知つてもう良い機会となりました。(※プロボノとは、ボランティア参加者ラボボノワーカー)が各自のビジネススキルを活かしてチームでNPOを支援すること。

NPOの小ネタ

今、鳥取県で認証され、活動している特定非営利活動法人(NPO法人)は255団体あります。所轄府別の認証数で言えば、鳥取県は47都道府県中46位と、決して多いとは言えない数字かもしれません。が、例えば、県内にあるコンビニの店舗数が220店ですので、市街地では数百メートルに1店はあるコンビニよりも多いNPO法人が活動していることになります。

いまとこれからのとつりのためのボランティア・地域づくり・NPOを考える情報誌

「いまと、これから。」 創刊号 2014年11月1発行(第1号)

発行：一般財団法人 とつとり県民活動活性化センター

発行人：山根剣 編集人：毛利葉

取材・編集：寺坂純子、椿善裕、谷布基、尾崎可愛、河上奈名子、藤田純子、森本周子、小原み幸
デザイン：石原達也 写真：市川貴美江

表紙モデル：池田りょうこさん親子 衣装協力：くらしのきほん/hahako

お問合せ：一般財団法人 とつとり県民活動活性化センター

〒682-0023 倉吉市山根557-1 パープルタウン2階

TEL: 0858-24-6460 FAX: 0858-24-6470

E-mail: info@tottori-katsu.net URL: http://tottori-katsu.net/

創刊号
特集

子どもたちの「いま」と、
「これから」の私たち。



一般財団法人 とつとり県民活動活性化センター

子どもたちの「いま」と、「これから」の私たち。



創刊号 目次

- *特集「子どもたちの「今」と、「これから」の私たち。」…1
- *高校生 ing 「加藤雅人さん」…9
- *REPORT 「つながるフォーラム」…11
- *理事長と事務局長のミニ対談 …13
- *小ネタと編集後記 …裏表紙

あたらしい情報誌「いまど、これから。」を手に取っていただき、ありがとうございます。「この情報誌は「いまど、からの」と「のため」のボランティア・地域づくり・NPOを考える」をコンセプトにしています。とつとりという地方での暮らしは、昔から変わらない部分がある一方で、少しずつ、でも確実に日々、変化をしてています。それは世界経済や日本の人口減少など、大きな変化によるものもあれば、自分が暮らす場所の半径30メートル以内に東京から人が移住してきた、というような、ぐくぐく身近なことまであります。この情報誌はそうした変化について、毎号一つのテーマを選び、そのことについて行動する人たちを紹介していきます。今の世の中ほど、これまでよりも一人一人の行動が響く時代はなかつた、いや、こうした響き方をする時代はなかつたのではないかと思います。それはインターネットの発達が大きいですが、そうした技術の発達に伴つて一人一人が表現することへのハードルも下がつたとも大きいと言えます。例えば、「こうした情報誌を出すことも簡単になつてきました。行動は響き、そして、ある意味で取り組みやすくなつてきました。そうなると、行動するかどうかを越えた先、どう行動するかが重要になつてきます。

この情報誌の発行元である一般財団法人とつとり県民活動活性化センターは、そうした「行動」を支援する組織です。相談対応やセミナーの開催、情報や資源の提供など、様々な方法で支援を展開しています。この情報誌もそうした支援の一つ。「行動したい」という方の意思を応援したいと考えています。情報誌を読んで行動したくなつた際には、ぜひ、お気軽にご相談ください。

さて、冒頭でも書きましたが、この情報誌では毎号テーマを決めて、そのテーマに関して「行動」するとつとりの方を紹介します。記念すべき創刊号のテーマは「子どもたち」です。

子どもたちは本来、好奇心のかたまり!
学びのスイッチを入れば、その目もキラッと光る。

どんな子どもでも、本來持つている力を十分發揮できる場や機会があれば、「あたま」と「からだ」をフル稼働させて、どんどん自然や社会や人間のことを吸収して自分の血肉にしていくことができます。例えば、自分を守つてくれる親やまわりの人たちから、愛情をたっぷり受けている子どもは、保育園や幼稚園に入つたときに最初はぐずつても、すぐに外の世界に溶け込めるといいます。豊かな人間関係に育まれ、競つたり協力したりしながら、子ども時代を十分に生きた子どもたちは、安心して社会にチャレンジすることができます。

しかし、そうした環境を得ることができない子どもたちがいます。いじめ、不登校、貧困、格差、虐待、暴力・・・子どもたちのことと伝えるニュースにはこうした単語が出てきます。それは都会だけの課題なのでしょうか。私たちが暮らすこの地域に暮らす子どもたちにも、様々な課題があります。

子どもたちは地域の未来を支える存在です。今は小さな子どもたちが成長し、学び、とつとりを支える若者になります。子どもたちの自立への旅は、多くの人々がその子の心の中に住まつているときにこそ、その一步を踏み出すことができます。そうした環境を、つながりをもてる子もいれば、もてない子もいます。

子どもたちの「いま」は、どうなっているのでしょうか。そして、子どもたちの「これから」のために、いま、私たちができることは、どんなことなのでしょうか。次ページから紹介します。

子どもたちの「いま」。

日本の子どもの6人に1人は貧困状態。

「子どもは社会の宝・家庭や学校だけでなく、地域で子育てを!」と、厚生労働省や文部科学省がスローガンを掲げはじめたのは少子化が社会問題になりました2000年前後です。これまでの「家庭」と「学校」の二者だけではなく、「地域」という第三者の存在をあらためて取り上げ、地域全体での子育てを推進してきました。しかしながら、それから十数年。果たして、子どもたちは地域の宝・社会の宝として育てられているでしょうか。

一方、子どもたちが抱える社会的に不利な状況、貧困や孤立を示すキーワードとして「子どもの貧困」という言葉が、最近では「ユース等でも頻繁にとりあげられるようになってきました。2012年の厚生労働省の調査では、「日本の子どもの6人に1人」は貧困状態にあるといわれています（18歳未満の子どもの貧困率※1）は過去最高の16.3%（※2）。さらに、ひとり親家庭に限ってみると54.6%が貧困状態です。これは、OECD加盟国、いわゆる先進国の中では最も高く、親がまじめに働いていても貧困状態から抜け出せない状況がそこから見えてきます。

地域社会のつながりが強かつた頃は、「親はなくて

も子は育つ」と言わっていました。異なる年齢の子ども集団があり、お金がなくても子どもたちが育つため



「困っている」「気になつている」子どもへのマンツーマンでの支援事業。

【先進事例紹介】「子どもの貧困」という問題。

京都市の山科区・伏見区醍醐地域という盆地で、地域のすべての子どもがよりよい豊かな育ちができる環境づくりに取り組んでいます。これまで地域で34年間、体験活動、文化芸術活動、創造表現活動、子ども会といった集団活動などを中心に取り組んできました。その中で、出会った「困っている子ども」や地域の方々が「気になつている子ども」へのマンツーマンでの支援事業にも取り組んでいます。

特にこの4年間はその「困っている子ども」の背景に見えた「子どもの貧困」という問題を軸に「安全・安心の確保（食事、居場所）」「自己肯定感の獲得（体験活動・学習支援）」「保護者のサポート（保護者会、サロン）」「小・中学校を直接応援（放課後支援、土曜塾、補習、教員研修等）」「人材育成ノウハウ蓄積・共有」「地域の支援ネットワークの構築・活動応援」といったことに取り組んでいます。子どもの貧困は「衣食住の不足」「ネグレクト・虐待」「文化的資源の不足」「低学力」「自己肯定感の低下」「不信・不安感」「孤立」

の厚い基盤が地域に存在していました。しかし、生活スタイルや居住スタイルが変化し、近隣付き合いも減少した現代では、お金がなくなれば、子どもの育つ環境は劣化し、世代を超えた貧困の連鎖を生み出すようになってしまいます。このことは、年収の低い家庭ほど4年制大学進学率が低く、就職する割合が高いことや、学生の生活費における家庭からの仕送りが減少し、奨学金の受給が増加しているといった傾向がデータからも読み取れます。

「貧困」は経済的な困難にとどまらない。「ゆっくり話を聞いてくれる人がいる」「楽しく会話しながら食事をすることができる」「落ち着いて勉強できる」などを実現する「これが難しい家庭」「関係性の欠如」という目に見えにくい困難を多くの子どもたちが抱えています。ゆたかな人間関係や安定した家庭環境を子どものまわりに築くことは、すべての子ども、子育て家庭に求められています。

鳥取県は、女性の就業率50%（全国6位）、共働き世帯の割合32%（全国9位）となっており、多くの家庭で仕事と子育ての両立や単独で子どもを育てることが厳しい状態にあります。一方で、幸いにも三

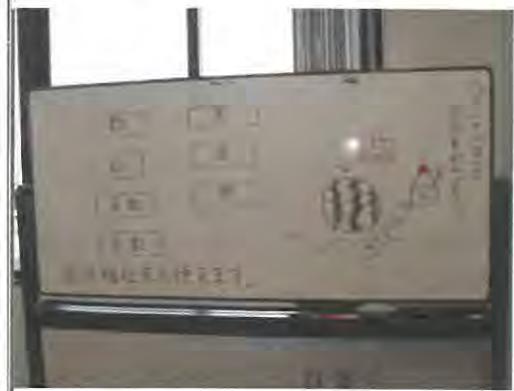
世代同居率が15%と高く（全国8位）、また、保育所の待機児童数はゼロ、小児科医の数も全国2位で一人あたりの児童福祉費も全国平均の40万円を大きく上回る52万円（全国2位）と、他県と比較すると恵まれた状態にあるとみることができます。また、豊かな自然や文化、地域のあたたかな人間関係にも支えられ、子どもが育ちやすい県とも言われています。今年2月、鳥取県では「子育て王国とつとり条例」が制定され、県・市町村・県民・事業者等が協働して、子ども・子育て支援の環境をさらに発展させていくことが定めされました。国においても「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が昨年6月に議員立法で国会の全会一致で成立。今年8月には同大綱が閣議決定されました。そうして政府や県も動き出していますが、それだけでは、一人ひとりの子どもをトータルに支えることは難しいのが現実です。

子どもの力は、新しい社会を切り拓く力です。それは私たち大人の希望とも言えます。ここからは、鳥取県内の各地で様々な状況にある子どもたちや子育ての支援のために行動する方々を紹介します。それぞの行動の最後には、「参加の方法」も掲載しています。この特集が、これから私たちのために、いまの子どもたちにできることを考えるヒントになることを願っています。

といった困難を子どもに与えます。このような問題を解決するためには多くの地域の方々の力が必要であり、実際の活動は地域住民、大学生、各種専門機関が手を取り合つて、みんなができる」とをひとつずつ責任をもち取り組んでいこうと創っています。

これまで50人の困難を抱えた子どものサポートを実施し、また学校連携により1中学校、4小学校の支援をしています。このような取り組みは全国では珍しいため、国が取り組む子どもの貧困対策について多くの意見を提案することや、各地ではじまりだアクションに向か多くの相談に応えながら、日本全体で子どもの貧困問題解決に向けたアクションを進めています。

なにより多くの子どもが何かしらまずきながら大人になり人生を歩んでいく上で、安心できるまち、やり直しができる社会であるよう親でも先生でもない「まなざし」で子どもに向き合つてもうえるよう尽力しています。



一人ひとりに合った学習支援～学ぶ楽しさ、わかる喜び～

置かれた環境によって抱える課題も違う子どもたちへ。



「でも、みんなで一緒に学習塾で遊ぶの、何がいい？」
それは、米子市福祉保健部福祉課と子ども未来課が
共同で行っている学習支援のことです。「生活保護受
給世帯」と「ひとり親家庭」の小学4年生から中学
3年までの子どもたちを対象として、今年の5月か
らスタートしました。現在、小学生13名、中学生23
名が、毎週土曜日の午後2時間程度、学習会に参加
しています。

「行政が行っているとはいっても、活動の主体はボラン
ティアの方々です。行政はフレーム作りをしています。」
と福祉保健部部長の石原さんは言います。20名の教
員・OB等と21名の現役大学生が学習支援や子どもた
ちの相談相手を担当しています。また、学習支援以
外のボランティアとして、9名の方々が会場準備や出
欠確認、バスの送迎等の運営のサポートをされています。
福祉課のケースワーカーや子ども未来課の職員は、
ボランティアの募集やコーディネート、スケジュール調
整などを担当しています。また、平成14年から16年
に開催された「米子市青少年育成ボランティア養成
講座」等にボランティアで参加された方々も運営を支
えてくださっています。

ママたちがこたつでみかんを食べながら言いあえる場所。そんな、ちよどい人数の親子ひろば「にこ☆にこ」が米子にあります。運営するのは「えがおサポート Leaf&CHUCHU」。もともと、環境問題を子どもや大人に伝える活動をしていた「Leaf」と、子育てに不安や悩みのあるママたちの支援をしていて、「CHUCHU」と2つのグループが子育てイベントで出会い、ひとつの団体になり、廃園になった幼稚園舎を借りて活動しています。

親子ひろばを運営するうちに、「子どもを気軽に預けられる場所がない」という声が聞かれるようになりました。子どもを預ける理由は人それぞれ。「髪を切に行きたい」「産後の整体に行きたい」「お兄ちゃん



ママに「寄り添う」子連れスタッフだから、その支援。

きっかけはいつも、困ったママたちとの出会い。

NPO法人えかおサポート Leaf&CHUCHU (糸子市)

そんな声をきっかけに、自分たちで託児所「一時預かり らん☆らん」を立ち上げました。預ける理由があるても、子どもを預けることに「罪悪感」を感じているママもいます。そうした気持ちを少しずつ軽減するために、子どもが泣いて離れられない時は、

童保育「のび☆のび」をスタートしました。やがて、そこに「障がい児を受け入れてもいいですか」と相談が入りました。そのママにできることを伝えながら「こんなことで困ってる?」「なにを気をつけたらいい?」と面談を重ね、軽度の障がい児保育「ぐん☆ぐん」も開始しました。

えがおサポーター Leaf&CHUCHU の皆さんは「子育て中のママたちの困った事情が解消されず、たまらなく困っている」とおっしゃる方々がいることをお聞きして、お手伝いするための活動を行なっています。

詰児をしていたら、今度は「1か月だけ預かってほしい」と。理由は第二子の出産です。上の子もまだ幼稚園・保育園に行つておらず、実家のご両親も一週間しか来れず、ものすごく不安との声。

細かなニーズに対応していくと経営としては苦しい。しかし、「ここで求められる」とは、きっと地域のお母さんのニーズ。「想いを形に」するため、今度は「1か月単位から気軽に入れる保育園」「るん☆るん」を始めました。仕事をしていなくとも、子どもと向き合っていても、預かってほしいママはたくさんいます。なので、あえて「働いていないママ」を優先しています。

また、子育ても、仕事も、頑張っているママへの支援も展開しています。子どもが夏休み中でもママは仕事を休めない。だけど、学童保育はいっぱいだと断られる。そこで「長期休みだけの学童をしよう」と学

うです「子どもを預かる団体はハイバルではない」と子育て支援センターへや重度障がい児の放課後デイなど、他の機関とも日頃から連携しています。地域がつながることで「ママたちの不安要素をどれだけ取り除いてあげられるか」。そのための連携です。また、子育てママに寄り添う子連れスタッフだからこそ、ママたちや子どもたちに地域や自分たちの「より良い利用方法」を伝えていきたいと言います。そして、子どもも大人も、利用する方も利用してもらう方も、共に育ち合う場所を目指しています。

りました。そこで、学習に取り組む前に、子どもたちが机に向かう習慣や、さらには生活習慣を身につけてもらう支援にも心がけています。学習面では、時間内に勉強が進む子もいれば、小学校のおさらいを繰り返しやっている中学生もいます。ここでは、子どもたちそれぞれの性格や抱えている課題を踏まえ、一人ひとりに合わせた教材を工夫するなど、子どもたちに寄り添った支援をしています。また、送迎バスの中や学習会会場でのマナー、いろいろな大人とふれあう場を通して、社会のルールを守ることの大切さを学んでもらえるようにもしています。子どもたちもボランティアの方々も一緒に悩み考えながら、「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」を日々共有しています。

「子ども☆みらい塾は今年が1年目です。すぐに成績は見えないかもしれません、5年、10年と続けることで、米子市の多くの子どもたちの未来が開かれていくようになると思って取り組まれています。「今後は、保護者の方々も交えて、みんなで課題を話し合えるようになります」と思っています。」石原さんの言葉から、皆さんこの事業への熱い想いが伝わってきました。

こんな参加を
求めてます！

① 施設運営のために寄付をお願いします

② 親子ひろばのボランティアサポーター（年齢問わず）を募集しています！

NPO法人 えがおサポート Leaf&CHUCHU
<http://egaosupport.chu.jp/>
〒683-0801 鳥取県米子市新開 6 丁目 11 番 1
TEL : 0859-33-4122 FAX : 0859-33-4122

えがおサポート
Leaf&CHUCHU
のみなさん



米子市
福祉保健部長
の石原さん

こども☆みらい塾

〒683-8686 烏取県米子市加茂町1丁目1番地 米子市役所
福祉保健部福祉課 TEL: 0859-23-5151 FAX: 0859-23-5550
こども未来課 TEL: 0859-23-5176 FAX: 0859-23-5137



一緒に悩み、一緒に学び、一緒に楽しむ支援。

保護観察中の少年たち。

鳥取地区BBS会のみなさん

こんな参加を
求めてます！

①一緒に活動する会員を募集しています。

会員を募集しても、「非行少年と活動する」と言

うと怖がられてしまうことがあります。言うと警戒されると相手は違います。上の年代・下の年代を問わず、いろんな年代と接する機会があれば、そこから「ミニミニケーションの取り方を学び、社会参加につなげられます。

会員がいれば」と上遠野さんは話します。「保護司さんと相性のいい子」「BBS会員と仲良く話ができる子」など、個人によつてうまくミニミニケーションが取れる大濱さんは最初、保護観察中の少年たちを、ちょうど遠くに感じており、接するのもちよと怖く、また、相手にしてもらえないんじやないかと思つていました。しかし、実際に一対一で話をしてみると、ちゃんと話もできて、いい意味で「私たちと一緒に」であり、「どこにでもいる普通の子」だなど感じました。

ただ、一対一で接するのは大丈夫な少年でも、大人数の中でのミニミニケーションを取るのが苦手な子が少なくありません。学校や塾で、同年代や先生とのコミュニケーションがうまく取れない、勉強ができないことへの劣等感で、問題を起こし、また不登校になると感じています。「もっと多くの世代の人と関わる機

BBS(Big Brothers and Sisters Movement)は、非行少年や心のよりどころを求めている子どもにとっての近所のお兄さんやお姉さんのような存在として、一緒に悩み、一緒に学び、一緒に楽しむボランティア活動です。鳥取地区BBS会では、子どもを対象にした学習支援や非行少年たちとの海岸清掃などの社会参加活動を行っています。また、新たに小学生を対象に夏休みなどの長期休暇中に公民館で宿題を教え、一緒に遊ぶ「寺子屋」という活動や、家庭の事情などで塾に行けない子や不登校の子、発達障害を持つ子の家庭に向つて勉強を教える活動も始めています。年の若いお兄さん、お姉さんが子どもたちが心を開きやすいことから、メンバーは鳥取大学の学生さんがメインです。

鳥取市内の住宅街に建つ「鳥取こども学園」。この児童養護施設では何らかの理由で保護者と一緒に生活できない子どもたちが暮らしています。「ふじ」「ひまり」などの名前がついた8つのホームに、年代の違う子どもたちが分かれ一緒に生活しています。「以前は、数十人で一緒に集団生活をしていましたが、子どもにもっと寄り添えるように、今は少人数のホームにしています。」と園長の藤野さんは話します。福祉制度に子どもを合わせるのではなく、子ども一人ひとりとの関係を大事にしたい。藤野さんの「子どもたために何でもやろう」という言葉を表すように、創立以来、年々変化していく子どもの問題や、そこから生まれるニーズに合わせて、さまざまな施設を開設・運営してきました。

「鳥取こども学園」から始まり、保育所の「鳥取みどり園」、そして、施設を卒業したOB・OGの子どもをサポートする「ひだまり」など、多岐に渡るそ

社会福祉法人 鳥取こども学園（鳥取市）

蓄積されてきた経験と知識を活かした現場の支援。

何らかの理由で親や保護者と一緒に生活できない子どもたち。



園長の
藤野さん

園長の
藤野さん

ています。

藤野さんの両親も、「こども学園の職員（お父さん）は前園長）でした。昔、職員は住み込みだったため、藤野さん自身も「こども学園で育つてきました。学校を卒業後、一度、鳥取から離ましたが、昭和51年に職員として戻つてきました。その当時、一般家庭の高校進学率は約90%。しかし、「こども学園の子どもたちのように親がない子の進学は金銭的に難しく、進学率は20%程度だったそうです。

「制度上、進学しない場合は「こども学園に住めなくなる。だから、中学卒業後は住み込みの仕事を探さないといけなかつた。ですが、本当にケアが必要なのはそういう子どもたちなんですね。」藤野さんは「全員を高校に行かせたい」との思いから「高校全入運動」を行いました。結果、今では多くの子どもたちが進学できるようになりました。

しかし、「大学」の進学率は、まだまだ大きな差があるのが現実です。大学の進学率も上げていき、「世代間の連鎖」を断ち切りたいと藤野さんは強調します。

今、子どもに関わる問題で増えてきているのが「虐待」です。虐待は、子どもたちから安心・自信・自由を奪つてしまします。トラウマやフラッシュバック、自信のなさで、自分の人生を自分で選べなくなってしまいます。

まう。その傷はきちんと癒す必要があります。そして、自信を取り戻して社会に出ていくようにする、ことが必要です。子どもが、成長して自分らしく歩んでいくためには、心のケアと進学などの環境面のケアとの両方が必要です。

子どもの人権を中心据えて子育て文化を作りなおす」とが、子どもたちの「これからのために重要なところ」の施設に蓄積されてきた多くの知識と経験を活かし、施設が地域の子育ての拠点として、地域の子育てをすすめていく。「勉強を教えるボランティアに参加する」、「施設に寄付を行う」など、地域にいる私たちができるとは実はいろいろあります。「まずは実態を知つてほしい」と藤野さんは言います。知ることが最初の一歩。そこからできることが広がつります。

- ①制度内の経費で貰えない支援のため
寄付で子どもたちを支えてもらいたい！
②勉強を教えるボランティアを募集しています！

鳥取地区BBS会

<http://ip.tosp.co.jp/i.asp?i=tottoribbs>
〒680-0842 鳥取市吉方109 鳥取保護観察所内
TEL: 0857-22-3518 (鳥取保護観察所内)

社会福祉法人 鳥取こども学園

<http://www.tottorikodomogakuen.or.jp>
〒680-0061 鳥取市立川町5丁目417
TEL: 0857-22-4206 FAX: 0857-23-0242



トツトリハイスクールプロジェクト

加藤 雅人さん（高1）

現在進行形の高校生の
動きを紹介する

高校生ing

中学1年生の夏休み。

あなたは、何をしていましたか？

…部活の練習？ 花火大会？ 宿題？

彼は仲間を集め始めました。

YouTubeやUstream、Twitterが伸びてきた時代。

それを使って「中学生でも何かできないか」

そう彼は思い立ちました。



しゃんしゃん 2013 取材中



しゃんしゃん 2013 配信前



Ustream 配信機材



メンバー集合写真（砂丘一斎清掃）

協力してほしいこと

- 活動に理解を示してほしい
学校の活動でもない、部活でもないという自分たちがアポをとろうとしても理解されにくい。
学生が自由に動ける、高校生が集い、フリーに使える場所が一か所でもあれば。

トツトリハイスクールプロジェクト（以下、トリプロ）リーダーの加藤雅人さんは、現在高校1年生。「もともと小学生の頃から個人でブログを書いていました。中学生になり、友達と一緒に何かひとつものを作りたいと思いました。ちょうどその頃、塾に行くときの鳥取駅前の閑散とした感じが気になっていました。」それが、鳥取市の中学生がインターネットを使って鳥取を元気にするプロジェクト『トリ中.net』の始まりでした。

友達に声をかけ始め、5人が集まりました。初めての取材は中1の冬の「砂丘イリュージョン」（今でもYouTubeで見ることができます）。取材交渉、企画書提出、撮影ナレーション、編集、配信全て自分たちでやりました。部活と両立しながらの、主に長期休みを利用しての活動。最初は学校と切り離した活動にするつもりでしたが、思いがけず学校に知られて、その後は学校に活動の報告をしな

がら続けました。

中学2年生の時には、企画コンペで1等をもらい、その賞金で配信機材を強化しました。「湖山池ヨット大会」の取材や、また「五臓圓ビル」を借りての Ustream 配信（インターネットでのリアルタイムの動画発信）にも挑戦しましたが、順調とはいえませんでした。回線不調、カメラトラブル、視聴者数もなかなか増えない…「これじゃダメだな」と気づき、そこからこれまでしなかつた打ち合わせもするようになりました。その後も「しゃんしゃん祭り」の「オープニングイベント」は「トリプロ」として再スタートしました。

そして、高校に進学。「トリ中.net」は「トリプロ」として再スタートしました。メンバーの高校はバラバラになり、それぞれの部活もあります。そこで、活動内容を見直すことにしました。「トリ中.net」の「鳥取を元気にする」というコンセプトは大きすぎた。トリプロでは「高校生目線で発信する」という自分たちの身の丈に合うところに重きを置こう。そして「トリプロ」の第一弾として、「こ

とめや（※）」で「高校生×大学生×社会人」による Ustream 配信をしました。今後の取り組みとして、高校生目線で町のお店を紹介するフリーペーパーの発行も企画しています。「自習のしやすさ」「自転車の駐輪スペースの有無」など、高校生に有意義な情報を届けるために、高校へのアンケートもとりたいと考えています。「どうやってアンケートを集めるか」目下悩み中です。同年代に「自分の住む半径1km範囲から出て、市町村範囲に目を向けてみてほしい。もう少し地域を知ろう。まちに出てきてほしい。」と加藤さんは提案します。

「バーデハット」に高校生を集め、学校とか先生をはずした上で Ustream 配信とかできたり…。彼と彼らの挑戦はまだまだ止まりません。

※「とめや」鳥取駅から徒歩5分の場所にある旧とめや旅館を活用したプロジェクトの開発基地。まちの実験室、開かれたミーティング・スポット。

とつとり県民活動活性化センターって、なんですか？

山根 社会情勢の変化や住民のニーズの多様化で行政の力だけで地域課題を解決するのは難しくなりました。そこでNPOやボランティア、地域づくり団体の方々の力を借りて、行政と連携する形で課題を解決していくかなければいけない、その際の協力関係をスムーズに構築できるようセンターが設立されました。

毛利 子ども・子育て、障がい者や高齢者の支援、まちづくりやアートの活動等、県内でも活発に活動が展開されていますが、情報発信や組織の運営・経営、ネットワークなどが弱く、ボランティア・地域づくり団体・NPO等を総合的に支援する機能が求められていると思います。また、人口減少社会が本格化する中で、県民の主体的な社会参画の機会を、さらに広げていくことが期待されていると思います。

二人はどのような経緯でセンターに関わることになったのですか？

山根 元々県職員をしていました。日野や八頭の県民局での勤務の際に、地域づくりに情熱を燃やす方々や地域おこし協力隊の方と一緒にして業務を行っていました。そのような経緯もあり、センターに関わることとなりました。

「理事長と常務理事のミニ対談」

とつとり県民活動活性化センターって何ですか？

山根 到
理事長

毛利 葉
常務理事

団体の現状やニーズを知るために、これまで60の地域づくり団体を訪問し、登録手続きを行っていただきました。年度後半は、新しい地域づくり団体にも登録を呼びかけていく他、鳥取県の全NPO法人（250余）を訪問し、声を聞かせていただく予定です。あわせて事業報告や決算報告、定款等を分析し、NPOの組織経営実態を調べ、提言していきたいと思っています。

倉吉のパーソルタウン内にある事務所も、団体登録していただけでは、会員等、無料で使っていただけますし、便利な場所なので様々な方が集っていたらよろしい場所にできればと考えています。

鳥取県のボランティア、地域づくり、NPOの今をどう見ていますか？

センターのこれからは？

山根 ボランティアについては参加率が高いという印象を持っています。また、鳥取県にはまだ地域的な連携が残ってるんだろうなという感じがありますね。課題としては、地域づくり団体の活動について情熱を持っている方はいらっしゃいますが、それがうまく次の世代につながっていくのかなというところがありますし、またやはり補助金がないと活動を継続するのがなかなか難しいのかなという印象もあり、今後民間の活力をいかに活用していくかが力ぎになっています。県民の社会参加の受け皿として、もっとNPOならではの機能を活かしてもらいたいなど

毛利 NPO法人に限つていうと、鳥取県は、寄付・ボランティア等の参加が少しく補助・助成金に依存している割合が高いと内閣府の調査結果がでています。県民の社会参加の受け皿として、もっとNPOならではの機能を活かしてもらいたいなど

思っています。逆に、行政職員の方が地域の活動によく関わられていると思います。よりよい協働関係が築いていくと、他県にはない財産になっていくのではないかでしょうか。また補助金の審査などで「自立を！」とよく言われます。確かにいつまでNPOは通常の企業活動では成り立たないのも補助金頼みでは困るのですが、もともと決策の提示によって、多様な資金源を獲得し持続性を確保しています。経済的にはなかなか自立できず、活動内容もなかなか理解されないことが多いです。あたかも見守り、かつ補助金が切れても活動が継続できるための支援体制が必要だと思います。

みんなで関われば解決できることは多いし、地域を楽しくゆかににするための活動も多種多様です。社会や地域の課題を提示し、その解決に向けて参加を促していく動きを広げたいと思います。

センターの
愛称・ロゴデザイン
募集中！

センターがより県民の皆さんに親しみを感じてもらえる存在でありたいと考え、センターの愛称・ロゴデザインを募集いたします。
採用された方・団体には、それぞれ賞状及び副賞を贈呈いたします。
募集に関する詳細は、後日、センターホームページ並びにチラシ等で告知いたします。
たくさんのご応募、心よりお待ちしております！



毛利 鳥取県の出身ですが、大学卒業後、広島で子ども・子育て分野のNPOに入社し、乳幼児から高校生・大学生、大人の方々と一緒に、自然体験や文化芸術の活動を楽しんできました。90年代後半のNPO法制定運動の中で、地域づくりや高齢者・障がい者支援、国際協力や環境保全活動等、参加と事業を通して新しい地域社会を創っていこうとする多くの仲間に出会うことができました。

6年前から「NPO法人ひろしまNPOセンター」で、団体の支援や企業・行政・NPO等の協働の仕事にかかわってきましたが、鳥取県に新しいセンターができ、職員を民間から募集しているというお話を聞き、実家がある鳥取県に戻ってきました。

毛利 事務局は、1月の設立時は2名。その後2月に1名、4月に2名加わり、現在は5名体制です。相談対応については、準備段階から、できる限り先方に向き合ってお話を聞かせていただきことにしていますが、設立から約60件の相談を受けました。内容は、法人の設立や運営・経営、NPOの認定申請、助成金の申請等が多いですが、地域の活性化や事業連携に関する相談もあります。（△）

センターはどんな人が運営していますか？

山根 センターとしては団体同士をつなげるプラットホーム的な役割を担つてきました。しかし、経営面などで専門的なノウハウを伝えていければよいと思っています。
毛利 現在、「ふるさとプロボノ」という首都圏や関西圏の企業人を県内のNPOにボランティアで関わってもらいまーケティング調査やWeb制作を支援してもらう事業をすすめていますが、外から人材や資金を呼び込んだり、民間同士で民間の活動を支えるしくみをつくり、民間の中から新たなリーダーが生まれてくるような支援をしていきたいと思います。

みんなで関われば解決できることは多いし、地域を楽しくゆかににするための活動も多種多様です。社会や地域の課題を提示し、その解決に向けて参加を促していく動きを広げたいと思います。